

ハリティとパンティカ像の背景

高橋堯昭

日蓮宗大荒行堂の行者擁護の神は言わずと知れた鬼子母神、然も行僧の袈裟の紋所は柘榴イロハ、実にユニークなとり合せである。なぜなら鬼子母神はもともと古代ベルシャの地母神・豊穡の神であり、柘榴はオワシス特有の果物であり沙漠を旅する者にとってはなくてはならぬ、いわば水筒のようなもの。これらが一つに結びついてシルクロードを通り、はるばる日本にまで伝えられて来た所に大きな興味を感じる。然もこのハリティはパンティカと結びついてクシヤンの時代に爆発的に作り出され、各寺々に安置され信仰されていたことは、パキスタン国内の博物館はもとより全世界に散らばった像からも裏付けられる。

然らばなぜこの時期に又この地域にこれら多数の像を造り出す信仰が形成されたのであろうか。



ヒンズー教関係のインド文献や史料はこの時代、即ちインドグreekからはじまってサカ・バルタイそしてクシヤンの外来民族の支配したこの時代を「Kali-Age」(悪しき時代)⁽¹⁾と評している。即ちこの時代こそインド本来の法Dharma(ダルマ) Varna, Caste に乱れが起き、カースト間に混乱の起きたゆゆしい時代だと考えられたからである。

これを単的に表現しているのはクシヤン時代に書かれたというプラクリットの法典「Angavija」⁽²⁾である。これは

ハリティとパンティカ像の背景(高橋)

今までの四つの Varna 即ち *Brahma* (*Brahmāna*) *Khatta* (*Kṣatriya*) *Vessa* (*Vaiśya*) *Sudda* (*sūdra*) の間の混乱、社会の変容を示している。即ち法典には次のような「mixed Caste」が出来たことを示しているからだ。⁽⁹⁾

Bambha-Khatta, *Khatta-bambha*, *Bambha-Vessa* *Vessa-bambha* *Bambha-sudda*, *Sudda-bāmbha* *Khatta-Vessa*, *Vessa-khatta*, *Khatta-sudda*, *Sudda-khatta*, *Vessa-sudda*, *Sudda-Vessa*, *Sudda-bhambha* *Bambha-sudda*

これらは Varna の乱れを禁ずるカウティリヤ実利論などではあり得べからざることではあるが、このような雑婚が行われていたということは「マムの理論はあるべき姿、*Angavija* の記述は当時のありのままの姿」と考えられる。これを裏付けるものとして *Assalāyana sūta*、漢訳では梵志類波羅延問種尊經⁽⁴⁾(東晉時代西域三藏竺曇無蘭訳)が「月氏國中これありと聞く」として「若波羅門娶利利女、利利女為生子、利利娶田家田家女為生子、田家娶工師女工師女為生子、工師娶波羅門女……」とこまかく階級間の通婚を記している。

又これらの社会的な混乱はあながちこの時代から起ったとは限らない。スッタニパータに「高い Varna に属する人が規定された仕事より他の職業につく」⁽⁵⁾とかスードラ出身のナンダ王朝が出来たりしているから現実社会はバラモンの理想通りには行かなかったことが想像される。然しこの趨勢が倍化されるのは何んといっても西紀前二世紀より西紀後二・三世紀の外來民族の侵入によってであろう。「富める土隸はおちぶれたバラモンの前を行きスードラでも主人の地位につき、貧しい富のないものはクシャトリヤやバイシヤでも土隸の状態に甘んじなければならなかった」⁽⁶⁾ということになる。

もともと上位の二階級、即ちバラモンとクシャトリヤは祭祀政治等と結びついて *ruling aristocracy* (為政貴族)

として存在して来たが、特にバラモンはやがて祭祀という本分を捨ててクシャトリヤと何ら違わない権力構造をもつて下部のバイシャ・スードラに対するようになっていた。然し外来民族の侵入はこれら四階級を共に被征服民族として彼等の下に置いた。従つてそこでは上の二階級と下の二階級の区別がなくなった。たかだか外来民族の代理として村落を統治する場合のみその優位性を保持するに止まった。ヒンズー聖典に言う「Vara Caste」の乱れた悪しき時代」が到来したのだ。その例としてマヌ法典ではサカヤその他の外国人を没落したクシャトリヤとみなしカーストの中に入れはじめてゐる。⁽⁹⁾ 否入れざるを得ない状況になって来たといえよう。

その実例は Iksvaku 王朝は西インドを支配していた Ksatrapa (外国人) と結婚し⁽¹⁰⁾ 又 Samudragupta の Allahabad Inscription にはサカ・クシャナーナの統治者が地方王家と結婚してゐる。⁽¹¹⁾ これは上位のカーストが力を失つたのみではなく、下の階級の上への社会的向上をもたらした時代的趨勢の故である。⁽¹²⁾

かくの如き Varna より実力による社会変動もやがてグプタ以後次第にカースト制度のしめつけによつて、このような mixed Caste そのものも四姓制度の下に再び包摂矯正されて行つた。然しブラーマンとクシャトリヤの結びつきと、ブラーマンとバイシャの結びつきは後の世まで続いて行つた。⁽¹³⁾ これは前述の如くバラモンが宗教をはなれて現世的世界にイニシヤティブをとつて行つたこととも関連する。

更に Angavijja はカーストを Aija (Arya) と mikku (mleccha) とに分け⁽¹⁴⁾ 前者は上位の三階級、後者にはスードラと土着民や外国人を含むとし Varna による区分で上位三階級はスードラに対するものとしていた。然し注目すべきはこの Angavijja の別の所では富裕者層を Aija とし使用人を Pessa とし区分し⁽¹⁵⁾ 上の三階級の外にスードラをも含めて Aija とし、被使用人・土隷と分けてゐる。⁽¹⁶⁾ これは所謂「Varna による分け方から」階級社会、「生れ

より富」の方が優先する社会に変わって行ったことを示している。

アルタシャストラも *Arya* と *Dasa* とに分けつゝ⁽¹⁷⁾、即ち *Arya* は *Sudra* を含める四つのカーストとなり、*Dasa* は *slave*（土隷）だけ。（勿論 *slave* は主に *Sudra* 層から得られるのであるが、）

これと同じ分け方は前述の *Assalāyana Sutta* も *Arya* (*master*) と *Dasa* (*slave*) とに分け、又 *mindanpha* も「ヴァイシヤとスードラのなすべきこととして耕作・商業・牧牛」とヴァイシヤとスードラを同一のカッコでくっているし⁽¹⁸⁾、又同じ *mindanpha* に「村長が村人を集合させる」という話の中で戸主だけが集合し、「村人はこれだけです」と言い切り、この集會に集らなかつた者を「婦人・男子・下女・下男雇人・使用人・村民・病人・牡牛・小牛・羊・山羊・犬」と動物と同一視されるような人間の存在を記している⁽¹⁹⁾。

このように上記の記録は社会が単なる生れ *Varna* による区別から「持つもの」と「持たざる者」とに分化して来た当時の社会の状況を示しているように思われる⁽²⁰⁾。



更にマヌ法典の「夫妻の義務四十四」に「原野は木材を伐採した者に属し……」とあるから土地を開墾した者はその土地が自己のものとなった。*mindanpha* の「ジャングル変じて開かれた土地と成る」⁽²¹⁾の表現の如く農民はほとんどん木を切り開墾してその財をひろげて行くことが出来た。時恰も考古学的に見ても良質の鉄の農具への使用が進められ大木の伐採が容易になって行ったと考えられるから。

特にタキシラ⁽²²⁾、カウサンビー⁽²⁴⁾、ハスティナガールの発掘によつてはスキ・クワ・小スキ・鎌等の改良が進み、クワと小スキは齒の巾が大きく又持ち易いように柄が曲つたり、又齒自体も切れ易いようにカーブして来て、飛躍的な生産

が想像されるような改良発達が行われていたことが分る。然もマウリヤ朝では開墾は国家的事業として行われていたが、クシャン朝では個人の企業として行われて来たことが特徴的である。この個人の意欲によって所有出来るという方法はスードラをしばりつけていた束縛から解放し、彼等に土地を与えて生産をあげようとしたことにも連る。このような自由化の方向はマヌ法典では極力これを防ごうとし、Yajñavalkya Smṛti (西紀百年から三百年) の時代になるとこの傾向は序々に強くなって行くから、農業にとつてこの時代が一番自由な時代であったと考えられよう。

時恰もシルクロードの通商が盛んになり、ヴィーマ・カドフィース王によってローマと同一の規準によって金貨を作つて通商にはげむ時代、通商にはげむバイシャ更に前述のミリンダンパーに示されるように商業に従事するスードラ等、下層賤民の実力の向上めざましく、否、下層民が容易に実力をもち得る自由な時代なればこそ、この社会の逆転がますます進んで行けた。これがクシャンの時代の社会的趨勢であつたと考える。

従つて土地をもち、生産を上げ得るものは労働にたずさわる下部のカーストのもの、又同様に商業にたずさわりの大な富を所有出来るのもバイシャ・スードラの下部のもの。かくてこの時代の社会相は「国王大臣を枕頭によびよせる」長者の出現する時代となつた。

このように自由意志で努力すればする程大きな富が得られる可能性をもちうる時代なればこそ生産の神たるハリテイーと財宝金銭の神たるヤクシャの主神バイスラバーナへ人々の信仰が注がれるのは自然の勢いである。然もハリテイーもバイスラバーナも共にヤクシャ(夜叉)、神としては低位の神である。社会的には低位のカーストにある農民商人達とアナロゴス(類比的)であり、彼等がこれらの神に親近感をもつのも無理からぬことであつた。然もこれらの神々は心の修養とか教養とかむずかしい理論を必用としない。唯赤子が母の乳を慕うがごとき誠信(バクティ)さ



写真は筆者蔵ハリティとバンティカ像

えあれば現世の欲望を容易に充足させてくれるという。社会の底辺にあるものにとっては実に身近な直接的な神々である。然もこの生産と金銭の獲得によって社会的実力を得、上部の人達を圧えることが出来る。「富即社会的ステータス」というこのような状況からハリティとバンティカの像が爆発的に作り出されて行ったと考えられる。

然もこれらの神々に富を求める傾向は低位のカーストの人々に止らず、シルクロードの通商の盛んなこの地では社会全体の希望・要請となって行った。その一例はマトゥーラ近くの *palikhera* 出土のハリティとバンティカ像⁽³⁰⁾がクシャーナ家の人々の奉獻になるものである。かくシルクロード中継点のこの地ではこの社会的背景をぬきにしてはハリティとバンティカ像の出現は考えられない

◆ 豊満な肉体をもったテラコッタの像がベルシヤカ

ら出土している。これがハリティの原型である。³¹⁾これは多産という富を表象するためのものだ。これらが東漸してガ
ンダーラの地で仏教にとり入れられ、大乘仏教の精神たる利他の誓願の思想に潤色されて独得な仏教説話を生み出す
に至った。そこではもとの生産の神からはなれて慈悲の願行が表面に出て来る。即ち「夜叉女が人間の子を食べた贖
罪から人間の子供を永代にわたって守るといふ誓いをたてる」といふ神話が作られたが、この夜叉女が千人もの自分
の子を持つているという話の中にも多産という本来の意味を失っていない。それにもましてザクロの実の中の無数の
種、これこそハリティの豊稔多産をシンボライズするもの、富の神の面目躍如たるものがある。しかも興味あること
はアーリヤンのパンテオン（神々の体系）に他の系列の神がとり入れられる時必ず低位の神として包容される事例か
らも、この鬼子母神が夜叉神として神の体系にとりあげられたのはこの神が外来の神であるといふ証拠であらう。

一方、ギリシャの神ペンティカの姿で表されるのはヤクシヤの主神バイスラバーナである。即ち毘沙門天はリグベ
ーダや他のベーダーにヤクシヤとして非常に早くから出ている。本来は非アーリヤンのもの、アーリヤン民族がイン
ド定着前にあつた土着の宗教の神だ。³²⁾従つてベーダーにとり入れられても前述の如く陰とか闇とか暗い所に住む邪悪
な存在として考えられていた。その為大地とか山の主とされ、又これがやがて鉱物や寶石の神として信ぜられるよう
になった。然してシバ神をはじめインドの在来の神々即ちアーリヤン以前のものがアーリヤンにとり入れられ、それ
が又やがてアーリヤン系の神々をおさえて主神の座を占めて来るに従つて、この毘沙門天も本来の陰や闇の世界の主
から表の世界に変わり、金銭財宝の守護神として定着して行つた。³⁴⁾

又この二神は民間の信仰といふことではクシヤンのコインにはミントされていないが、B. N. MUKHERJEEやB.
N. S. YADAVA はクシヤンコインの pharro と Ardoshho の二神は或はハリティとパンティカを表わしたので

ハリティとパンティカの背景（高橋）

はないかとも言っている。もしそうならばこの信仰は通貨の流通する非常に広い範囲にひろがっていたことが想像される。又ヒンズーの二聖典ラマヤーナやマハバーラタに毘沙門天は *naravahana* のタイトルで出て来、又この *naravahana* は *Angavijja* とも出て来るから当時相当信仰されていたことが分る。

更にアルタシャストラ⁽³⁵⁾には「都城の居住」という項で「主都の中央にアバラチタ・アブラティハタ・チャヤンタ・ヴィヂヤンタの神殿及びシバ・バイスラ・バーナ・アシュウィン・シュリー・マディラーの神殿を建立すべき」とあるから毘沙門天は都の守護神の一として信仰を得ていたことがわかる(点線筆者)。

又仏教ではパールフットの彫刻の中に「*kuprio yakho* (*Yaksa kupriya* [*Kuberā*]) と銘⁽³⁶⁾があり。又 *Diganikāya* (III 200) や *Sutta-nipata* にも *vahana* として出ている。玄奘の大唐西域記にはバルフ・カビシヤそしてコータンで毘沙門信仰があったことを示しているし、*nahanasyuri* はガンダーラでクベラ信仰が顯著であったと記している。⁽³⁸⁾ かく大唐西域記をはじめ諸般の資料から見られるように毘沙門信仰が主に西北インドで盛んであったことはシルクロードの通商と無関係であり得まい。特に筆者所蔵の像の如くベルシヤにオリジンをもつ鬼子母神と結びついて一つの像が形成され、恰も夫婦神の如き姿を呈している。これから考えると法華経の中のダラニ品に両神が共にとりあげられたのも偶然ではないと思う。共に夜叉の神であり豊穰と財宝という現世的な欲望を充足するという庶民的な信仰、これこそ西北インドという土壤で成立するにふさわしい神々であった。



私は先号の棲神にクシヤン朝カニシカ・フヴィジカの金貨について考えてみた。それは王の肖像の裏にミントされた神々の像のうち、ギリシヤ西アジア系数ヶ、ベルシヤ系十数ヶ、インドの神々が四乃至五と広く東西の神々を網羅

していた。このことからこれらコインの使われた世界は実に普遍的な世界であったことがわかった。従つてこの広く開かれた世界に大乘仏教は成立した、いわば大乘仏教の故里、基盤をこれらから推量して来た。

然して今、このクシャンの領域に於て横のひろがりだけでなく、縦の方向、即ち社会の構造的に、カーストの階級制度がゆるみ平等化が進んで行つた。Yamaの差という差別から富者と貧者の「階級」の世界に変わり、従つて実力のあるものが上位につき、或は自らを墮して土隷に売る（マヌ法典）ような流動的な社会にもこの地方はなつていた。これはインド史上特筆すべき事実であつた、即ちこの現象も又すぐグプタ以後にはカースト制度の強圧の中になんじがらめになつて行くインド社会中で非常に特異な時代であつたといえよう。

このように自由な、そして平等な環境であつたればこそ、大乘仏教という、より普遍的な思想が生れ出たと言ひうる。いわばハリティとパンティカ像の出現の世界こそ、これを指し示すものであると私は考へる。

そもそも仏教はガンジス流域に於ける米作農耕の余剰生産物の交換を契機として、経済の広域化、都市の発達、商人階級の成立。これを反映するかの如き政治的な統一化。即ち十六ヶ国から八ヶ国、そして四ヶ国・二ヶ国、最後に釈尊後マガダに統一される普遍化のプロセスに於て釈尊の思想を生み出して行つた。

これが第一期の平等化の時代というならば、今北西インドで東西交流という普遍化の波にあらわれてカースト制度がゆるみ平等化に進んで行くこの世界は所謂第二期普遍化の時代の醸成と言ひえよう。これこそ大乘仏教の成立の基盤である。然もこれを裏返してみるとこの時代こそハリティとパンティカ像が無数に彫られ信仰されて行つたインド史上絶えてない下層民の激刺たる活力の時代、自由平等の時期ではなかつたらうか。そしてその地域は東西の通商の栄えた広い意味のガンダーラではなかつたらうか。私はかく考へここに大乘仏教の故里をみるのである。

[註]

- (1) B. N. Mukheljee, Indian history Congress Presidential Address 1981
- (2) B. N. S. Yadava, Some aspect of the changing Order in India during the Saka-Kusana age
- (3) B. N. Mukheljee 上記論文 p.7~8
- (4) B. N. S. Yadava 上記論文 p.75—76
- (5) 大正蔵一教入ノコト・中
- (6) 聖徳太子伝 卷ノリキ一タ 一三三頁
- (7) B. N. Mukheljee 上記論文 六頁
- (8) D. C. Sircar, Indian Epigraphic glossary p. 61
R. C. Majumdar, Champa (Inscription)
- (9) Manu Smṛti, x43—44
- (10) BC. 2C. mahabhaṣya 註 yavana ヲ Saka 也 Sudra ヲリヤシニシテ
- (11) Liders' List, No. 994
- (12) Fleet, Corpus Inscriptionum Indicarum, Vol 3 Insc. No1
- (13) B. N. Bukheljee 聖徳太子
- (14) 祖 (〜) ヲニシ
- (15) Angavijā p.149 } 其ノ B. N. Mukheljee 論文参照
- (16) Angavijā p.218 }
- (17) Angaujja
- (18) B. N. S. Yadava 上記論文
- (19) “ニハニハノニシテ” 聖徳太子傳 卷ノリキ 一四ノ
- (20) Rhys Davids 聖 一教 p.247 Adoration of relic
- (21) Milindañā, Rhys Davids Voll.1 p.206

- (32) A. N. BOSE, Social and Rural Economy of Northern India (600BC—200AD) p. 63
- (32) Milindāṅga 4—1—41
- (32) Angavijā p.233, p.258
- (32) Marshall, Taxila Vol.2 p.559 Pl.169
- (32) G. R. Sharma Excavation at Kauśāmbi (1957—59)
- (32) B. K. Thapar, In ancient India No10—11 Fig 32. 33
- (32) トクガキ 四—11頁
- (32) Sharma, Sudra in Ancient India, chapvii.
- (32) 折敷 隆雄
- (32) B. N. S Yadava 稲葉 節
Mukheljee
- (32) Rosenfield, Dynastic Art of Kushan
- (32) ホクホノ Museum 盛長 田邊
- (32) B. N. S. Yadava 稲葉 節 p.85
- (32) C. F. Veronica, Indian Mythology p.84
- (32) Zimmer, Myths and Symbol in Indian Art and Civilization p.70
- (32) ホンナンヤスエト 11巻四頁
- (32) Indian Museum in Calcutta 印度の古史の
Heinrich Zimmer, The Art of Indian Art Vol 1 p.44 p.86
naravāhana 大木 隆雄の著への
- (32) A. K. Coomaraswamy, Yakṣas Parts I and II.

ハリタイとバンティイカ像の背景 (高橋)